漢字二字熟語における動詞構成要素の位置的頻度

テリー・ジョイス
（JSPS 特別外国人研究員・アジア・アフリカ言語文化研究所・東京外国語大）
key words: 漢字 2 字熟語、レンマ・ユニット・モデル、動詞構成要素、位置的頻度

目的

Joyce (2002)は、漢字二字熟語のターゲット刺激に対して、5 つの造語法条件でのプライミング効果を比較し、「動詞+補足語」条件においてだけ、プライム刺激としての「前の漢字」が「後の漢字」に比べて反応時間が有意に速かったと報告した。この結果は、Joyce (2002)が提唱している「レンマ・ユニット・モデル」における語彙表象の特徴にとって重要である。Taft、Zhu & Peng (1999)は、中国語熟語における漢字表象は位置的違いの影響を受けないと示唆している。しかし、漢字二字熟語の漢字の位置的頻度が、漢字の品詞に厳密に関係しており、熟語のレベルでは造語法の影響も否定できないだろう。「動詞 + 補足語」条件において、「前の漢字」の反応時間が速かったことを更に検討するために、Joyce (2003)は、構成要素形態素の使用頻度データ(Joyce & Ohta, 2002)を参考して、「動詞＋補足語」と「補足語＋動詞」の漢字二字熟語において「動詞」の位置的頻度を統制し、低率の LPR-V+C と C+LPR-V と高率の HPR-V+C と、C+HPR-V という計 4 つの条件を設けて、構成要素形態素プライミング法による語彙判断課題を再び行った。

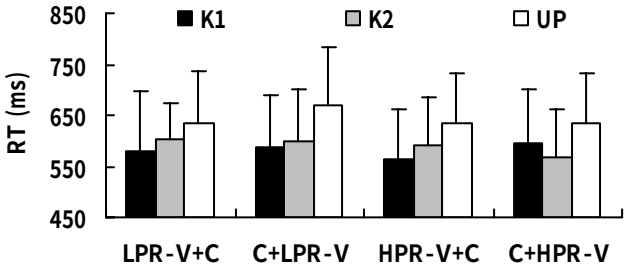

図 1　各造語法条件における語彙判断課題の反応時間(Joyce 2003)

図 1 で示したように、低率条件の場合、「前の漢字」と「後の漢字」では、反応時間に有意差はなかった。しかし、高率条件の場合、動詞の構成要素条件は、それぞれの補足語条件に比べて、反応時間が速かった。動詞の位置的頻度が高い漢字二字熟語において、構成要素形態素からのプライミング効果の逆のパターンが得られた事実は、少なくとも、その漢字の表象の活性化には位置的差違が影響することを示唆している。しかし、造語法の関係で刺激に使用できる漢字に限界があった。そこで、本研究において、Joyce (2003)の結果を確認するために、ターゲット刺激に使用できる熟語を増やして「低率」実験と「高率」実験を別々に行った。

方法

被験者　筑波大学の学生 120 名（各実験 60 名）。

刺激　「低率」実験では、動詞の位置使用率が平均 10-11%である熟語 54 語を使用し、「高率」実験では、その率が平均 94%である熟語 54 語を使用した。両方の実験では、filler として別に熟語 27 語を追加した。Joyce (2003)の実験では、各造語法条件間の熟語の平均熟知度は 5.58 あった。しかし、本研究では、造語法条件を 2 つの実験に分けたために平均熟知度を統一することはできず、「低率」実験では 5.42 で、「高率」実験では 5.80 であった。また、「前の漢字」(K1)、「後の漢字」(K2)、プライム無し(UP)の 3 水準のプライムが設けられた。

手続き　注視点（250ms）、プライム刺激（200ms）、マスク（50ms）、ターゲット刺激（反応まで）という流れで構成要素形態素プライミング法を実施した。

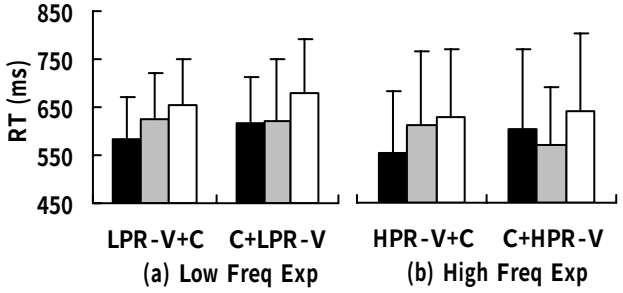

図 2　「低率」実験と「高率」実験における反応時間

結果

図 2 は、「低率」実験と「高率」実験の平均反応時間を示す。「低率」実験では、「前の漢字」と「後の漢字」とも、「プライム無し」に比べて反応が速かった。そして、LPR-V+C 条件下で、「前の漢字」の方が、「後の漢字」より反応が有意に速かった。

「高率」実験の HPR-V+C 条件下では、「前の漢字」の方が、「後の漢字」と「プライム無し」に比べて反応が速かった。C+HPR-V 条件では、「前の漢字」と「後の漢字」とも、「プライム無し」に比べて反応が速かった。しかし、HPR-V+C 条件下とは逆の、「後の漢字」の方が「前の漢字」より反応が速い結果となった。

考察

本研究では、動詞構成要素の位置的頻度において、「低率」実験と「高率」実験を別々に行った。位置的頻度が高い場合において、HPR-V+C と C+HPR-V 間で、構成要素形態素からのプライミング効果に逆のパターンが、Joyce (2003)と同様に得られた。つまり、位置的頻度が高い「動詞」の構成要素条件の方が、補足語条件より、漢字二字熟語の反応を促進すると言える。このことから、日本語心的語彙における漢字の表象の活性化には、位置的差違が影響するということを支持する結果になった。また、今後「レンマ・ユニット・モデル」のような日本語心的語彙のモデルに、位置的差違が語彙表象の活性化に影響を及ぼしていることを説明できるようにしなければならない。

主な文献

Joyce, T. (2002). Constituent-morpheme priming: Implications from the morphology of two-kanji compound words. *Japanese Psychological Research, 44,* 79-90.

Joyce, T. (2003). Frequency and verb-morphology effects for constituents of two-kanji compound words. *The 4th Tsukuba International Conference on Memory (Human Learning and Memory: Advanced in Theory and Application),* 11-13 January, Tsukuba, Japan.

(Terry JOYCE)